

ビリギャルの話から

令和6年度の校長室だよりで2015年頃の「ビリギャル」の話題を取り上げました。話の概要は以下のとおりです。

『ビリギャル』は、勉強がまったくできず高校でも最下位だった女子生徒が、努力と出会いをきっかけに成長し、難関大学に合格するまでの実話をもとにした物語です。

主人公のさやかは、当初は勉強に対する意欲がなく、周囲からも「無理だ」と思われていました。しかし、塾の先生との出会いによって、「自分でも変われるかもしれない」と考えるようになります。

※塾の先生＝坪田信貴さん

先生は、さやかの可能性を信じ、決して頭ごなしに否定せず、本人のやる気を引き出す指導を行いました。その結果、さやかは少しずつ勉強に向き合い、自分で努力を重ねるようになります。最初は基礎からのスタートでしたが、あきらめずに続けたことで学力は大きく

伸び、ついには難関大学である慶應義塾大学に合格するという大きな成果を達成しました。

この話から学べることは、

- 人は適切な支えと励ましがあれば成長できる
- 「できない」と決めつけないことの大切さ
- 努力を続ければ大きな結果につながる



「学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話」を書いた、坪田信貴さんが、新しい本を出版しています。「勝手な夢を押しつける親を憎む優等生と、東大は無理だとバカにされた学年ビリが、現役合格した話」という本です。今回も、実話をもとに書かれた物語になっています。前回の本にも、学習に向けてたくさんのヒントが詰まっています。今回のこの本にも、たくさんの示唆がありました。そのいくつかを紹介し、自分たちの取組に生かせればと思います。

※健太、翔太は登場人物です。

「～ぐらい」という言葉

健太：落ち着きがなく、高3で「九九」ができない。レゴが好き。その健太と母、そして坪田先生（以下：先生）ら塾の講師と面談する場面です。

母：「小学生のころから、授業中じっとしていられなくて。中学校では『廊下に立っていなさい』と毎日言われてました。先生からは『特別支援学級を考えてください。』って言われて。でも私、どうしても普通の子と同じように育てたくて。この子だって授業ぐらいちゃんと受けれるはずなんです。塾も3つ通わせましたが、他の生徒の迷惑になるからと言って退塾処分。でもせめて高校ぐらいは卒業させたいんです。」

先生：「お母さん、一つ聞いてもいいですか。『ぐらい』という言葉、よく使いますか。」

皆さんどうでしょう。「～ぐらい」という言葉は私も結構使っているように思います。その言葉を坪田先生はこう説明しています。なるほどと思う内容です。そして、気を付けないといけないなと感じました。

先生：「宿題くらいやりなさい。漢字くらい覚えなさい。学校くらい行きなさい。そんな風に言っていないませんか。」

「実は『くらい』って、親が使っちゃいけない言葉ランキングの上位なんです。それ、『やっても対して価値はない』と言っているのと同じなんです。例えば『映画くらいしっかり見なさい』って言われたら、おもしろそう、見たい！ってなります？あるいは義母から『料理くらいはおいしく作りなさい』って言われたら、よーし頑張ろう！ってなりますか。」

健太の母は、先生の言葉から、自分の無意識の言葉が息子のモチベーションを奪っていたことに気がきます。

「東大生の親は、子どもに勉強を教えない」

翔太：親から「この子はバカだ」と言われながらも東大を目指す。また面談の場面です。

母：「小学生のころは翔太を教えていました。」

先生：「翔太くんは『九九』を教えたときのことを覚えてますか。」

母：「すごく大変でした。何度教えても覚えなくて、つい怒っちゃって。」



先生：「それお母さんのせいじゃないんです。心理学で『認知負荷理論』というのがあります。脳が一度に処理できる情報には限界があるんです。子どもの脳がコップだと思ってください。勉強の内容が水です。親が教えるとき、子どもの脳には『勉強の水』でなく『別の水』も注がれるんです。」

「『お母さんを怒らせたらどうしよう』という不安の水。『また失敗した』という恥ずかしさの水。『期待に答えなきゃ』というプレッシャーの水。これらの『感情の水』でコップが一杯になって、肝心の『勉強の水』が入らないんです。親子だと負荷認知が増えてしまうのです。『親子関係』『過去の失敗の記憶』『甘え』『反発』これらが全部脳のメモリを使う。」

「あと、親は無意識に『なんでこんなことも分からないの』と怒る。」

私はこれまでの校長室だよりでテスト後、保護者は決して点数に怒ることなく生徒と一緒に「なぜできなかったかを振り返ってほしい。」と提案してきました。でもその方法については考える余地がありそうだと思うしてきました。坪田先生は以下のようにまとめています。

親でなく第三者であれば、その負荷がない。純粹に勉強だけに集中できる。お母さんの愛情は素晴らしい。愛情が深いからこそ、教えるのは難しくなる。それは世界中の親が経験する普遍的な現象なんです。親の役割は教師じゃなくていいんです。一番の応援団長です。ちなみに、東大生の親の多くは、勉強は教えません。環境を整えて、信じて、待つ。それが最高の教育なんです。

この話を読みながら、我が娘の幼少期を思い出しました。妻は音楽教員で娘にもピアノを習わせようということになりました。その時、妻は「私が教えてもいいんだけど、(できないことに)イライラしてしまう。だからピアノの先生にお願いしましょう。」と言いました。今思えば納得です。

親の仕事は「環境づくり」。まさに、これだと思います。「信じて。待つ。」でも親としてはなかなか待てないですよ。その環境づくりについてはまたの機会に考えてみたいと思います。